

カカオキタ社のスタッフ、ヨセフ・カラフィールさんをご紹介します。ヨセフさんは1961年、当時まだオランダ領だった西パプアの北海岸デムタ郡アンボラ村で生まれました。そもそもヨセフさんはカカオキタ社代表のデッキー・ルマロペンさんとは20年来の友人でした。デッキーさん率いるパプア農村発展財団(YPMD)が1990年、デムタで水道プロジェクトを実施したとき、ヨセフさんは地元のボランティアとしてYPMDの活動に参加したのです。YPMDで数年働いた後デムタに戻り、海で魚を獲り、森で狩猟採取をし、2000年からはカカオの栽培も始めながら、10人の子どもたちに囲まれた生活を送っていたところ、2014年9月、デッキーさんから「カカオの民衆交易を一緒にやろう」と声をかけられました。自然と土地を愛し守る生き方を大切にしているヨセフさんは「デッキーの考えていることは良くわかる。自分はそれを現場で

形にしたい」と、迷うことなくカカオキタ社の仲間入りをしました。

ヨセフさんの仕事は多岐にわたります。産地で豆を買付けるときは品質管理者。住民が持ってくる豆を厳しい目でチェックして、カビが生えていたり夾雑物が多い豆は突き返します。倉庫では豆の追加乾燥から選別作業まで、若いスタッフに指示を出しながら自らも率先して作業します。夜の倉庫でヨセフさんが電気虫取り器でカカオ豆に寄ってくる虫を黙々と退治している姿を見たこともあります。貯蓄プログラムもヨセフさんの担当です。カカオキタ社ではカカオ豆の売上の一部を町にある民衆信託銀行に代理入金するプログラムを実施しています。生産者にカカオ豆代金の支払いをする横で、ヨセフさんが貯金を預かります。ヨセフさんの周りには通帳を手にした生産者が群がりますが、冷静沈着なヨセフさんはそのプレッシャーに



動じることなく、一人一人の貯金額をゆっくり数え、名前と金額をこれまたゆっくりとノートに記帳していきます。2015年6月から始めた貯蓄プログラムで口座開設者は141人になっていますが、いまだかつて通帳やお金の紛失などのトラブルはなく、生産者も大事なお金を安心してヨセフさんに託しています。

頑強な体躯に鋭い眼差し、一見こわもてのヨセフさんですが、他人の心の痛みがわかる、とても優しい心の持ち主です。沖縄やパレスチナの話をするとき真剣に耳を傾け、連帯したいと語る人です。

津留歴子(つるあきこ/ATJ)



● 民衆交易を陰で支える現地の方々をご紹介します。
ヨセフ・カラフィールさん
(パプア/カカオキタ社)

今月のTOPIC

ホンモノの
手作りチョコレート
ワークショップ



近年、Bean to Barチョコレートやカカオ分の高いハイカカオチョコレートが注目を集めるなど、新たなチョコレート熱が高まっています。いわゆる製菓用チョコレートを溶かして固めるのではなく、原料のカカオから「ホンモノの手作りチョコレート」を完成させるAPLA主催のワークショップも人気が高く、2013年から全国100か所以上で延べ人数2000人近くの参加者を集めてきました。

どの会場でも感じるの、とっても身近なお菓子なのにあまり知られていないカカオやチョコレートの魅力がダイレクトに伝わる良い企画だなあ(自画自賛ですね。笑)ということ。参加者の皆さんの表情が物語っています。そして、ただ楽しい・美味しいだけではなく、カカオやチョコレートを通じてつながっている世界のことを一人ひとりが考えるきっかけとして大きな力を持っていることも、アンケートの回答を読ませていただくたびに思います。

2017年1月、2月にも、関東でいくつか開催が決まっています。詳細が決まり次第ウェブサイトやSNSでアップデートしていきますので、ご興味がある方はぜひ！ 野川未央(のがわみお/APLA)



特定非営利活動法人APLA (Alternative People's Linkage in Asia)
フィリピン・ネグロス島での30年の経験を活かし、「農を軸にした地域づくり」のためのネットワークの構築を目指して、出会いや交流の場の創造を進めています。【HP】<http://www.apla.jp>



株式会社オルター・トレード・ジャパン(ATJ)
パランゴンバナナやエコシュリンプなどの食べ物の交易で、生産者と消費者を顔と顔の見える関係でつなぎ、人と人、自然が共生できる社会づくりを目指しています。【HP】<http://altertrade.jp/>

過去のニュースはこちらからご覧いただけます。
<http://www.apla.jp/archives/publications-cat/ptop>



2017年1月 vol.10

特定非営利活動法人 APLA/あぶら(株)オルター・トレード・ジャパン(ATJ)
〒169-0072東京都新宿区大久保 2-4-15 サンライズ新宿3F
TEL:03-5273-8160 FAX:03-5273-8667 E-mail:info@apla.jp

PtoP
特集

パラダイスパプア

わたしたちのカカオを 味わいたい



人びとが大切にしてきたカカオ

インドネシア・パプア州ではオランダの統治下だった1950年代にカカオの栽培が始まりました。それから60年あまり、カカオキタ社(先住民のカカオ事業体)のメンバーは先代から受け継いだ丈夫なカカオの木から苗木を育てカカオの森の再生に取り組み始めました。「カカオ・ブランダ(インドネシア語で「オランダのカカオ」)は病気に強くて良いカカオだ」、パプアの村々で生産者がよく口にする言葉です。カカオキタと一緒に取り組む生産者の奥深い森の中、1950年代に植えられた木に今でも果実が実っています。

パプアでカカオが植えられた当初、パプアニューギニアとの国境に近いジャブラ周辺地域では、パプアニューギニアのケラファットという町に設立された低地農業試験場(LAES)でできた交配種をオランダが広めたと言われています。当時植えられたカカオの苗木は、近年インドネシア政府が推奨・普及させている様な生産量を重視した改良種と比べて、収量は低いものの、病気や害虫に強く、



パプアのように農薬や化学肥料を使用しない非集約的なカカオが栽培されている土地柄に適しているとの調査結果が古い文献にも記されています。

カカオの2020年問題

2020年にはカカオが不足してみんなの大好きなチョコレートが食べられなくなってしまう。最近そんな話題をよく耳にします。病害虫の被害や油椰子のプランテーションなど他の作物への転換によりカカオの生産量は減少しています(世界第3位の生産国であるインドネシアの場合、過去4年間で28%減少)。また、人口の多い中国やインドでの消費増などの事情もあり、2020年にはカカオの生産量が需要に比べて100万トン不足する見込みであると、チョコレート業界は危機感を募らせています。チョコレートメーカーや穀物商社は、価格高騰を抑え数量を確保するために各地のカカオ産地で増産プログラム*1を展開しており、パプアでもそうしたプログラムに参加している生産者もいますが、その多くはパプアの外から移住してきたジャワ人などのグループです。

カカオの国際価格は、ニューヨークとロンドンに開設された先物取引市場での取引価格が基準となっており、天候や作柄、チョコレートの需給、投資資金の流入などにより日々変動しています。国際

ココア機関(ICO)によれば、近年カカオの生産者買取価格は10年前の約2倍になっています。生産者の暮らしむきは良くなってきたのでは……と思われるがちですが、残念ながら、主なカカオ生産国のカカオ農家の多くは未だに貧困状態にあると言われています。例えばインドネシアでは、著しい経済成長に伴い過去10年間で物価も2倍*2に上がっています。生産国の暮らし向きと切り離された、国際相場・先物取引市場で決まるカカオの価格。パプアのカカオ生産者もそんな世界経済の仕組みの中でカカオを収穫し仲買人に販売してきました。

パラダイス・パプアの挑戦

パプアのカカオ生産者たちは長年カカオを栽培しているにもかかわらず、これまでは仲買人に安値でカカオ豆を売るだけで、カカオ豆から作るチョコレートを食べる機会がほとんどありませんでした。日本で販売されているパプア州産カカオ100%のチョコレートを食べてもらおうと、目を丸くして「とってもおいしい!私たちはどうして今までカカオ豆からこんなに美味しい食べものができるのを知らなかったのか!」と嬉しさと驚きが入り混じった感想が返ってきました。そうしてカカオキタには「大切に育てたカカオを使ったチョコレートを自分たちも味わいたい!」という生産者からの声が寄せられるようになりました。ここから人びとによるパプアをはじめインドネシア国内で販売するチョコレート作りへの挑戦が始まりました。そして試行錯誤の末、ついに完成した、カカオ豆と砂糖だけを使ったシンプルなチョコレート。「パラダイス・パプア」と冠したそれは、カカオは森の果実だと実感できるフルーティーな味わいで、食べた人びとから「爽やか!」「後に引くおいしさ!」という声が上がりました。

「パラダイス・パプア」の名付け親、カカオキタ代表のデッキーさんは、「パプアの自然はパラダイス。そこで育ったカカオから美味しいチョコレートを作りたい。パラダイスは私たちが努力して守っていかなければならないもの」と言い、森のカカオを通じて、人と自然にとってのパラダイスがこれからも続くようにとの思いが込められています。

津留歴子(つる・あきこ/ATJ)

義村浩司(よしむら・ひろし/ATJ)



パプアでの挑戦が形になった「PARADISE PAPUA パプアクラフトチョコレート」日本でも販売中!

*1施肥、農薬の使用、農業購入資金のローン、農産物の販売を兼ねた普及員の育成など集約的・管理農業の普及
*2出典:国際通貨基金(IMF)、2005-2016年比較値